第363号 昭和50年9月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日第三種郵便物認可

昭和50年（1975年）
9月号（No. 363）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）
定価一部 100円

目　次

本文・紀行など
カスピ行（田口二郎）……（1）
板倉勝宣の墓碑銘
（安川茂雄）……（2）
東海道線の車窓から見える
南アルプス（石間信夫）……（3）
草木叙情・早春
―坂本直行・佐藤久一朗の
スケッチに讃す―
（伊藤秀五郎）……（8）
講習会・集会報告
第15回登山技術講習会
もう一度考え直そう……（5）
第321回現地小集会
≪上高地山研≫印象記……（6）
阿寺沢山峡三水会
現地集会報告……（7）
日本山岳画協会について
（藤江幾太郎）……（11）
図書紹介
わが青春の登攀
ボニントン著・青柳健訳……（6）
ヒマラヤ（第2版）
ケニス・メイスン著
田辺主計・望月達夫訳……（7）
アメリカン・アルパイン・ジャ
ーナル73，74年版……（7）
その他
会員動向・受入図書など…（11），（12）

カスピ行

田口二郎

さる四月商用でテヘランを訪ねた際、エルブルズ山脈を車で越えカスピの沿岸に一泊、イランの名山ダマヴェント（海抜五六〇〇メートル）をぐるりと一周してテヘランに帰った。地図なしでは書きづらいが、その時の二日間の車の旅の模様を記してみよう。

不勉強でテヘラン市について知るところのなかった僕は、同市に着いた翌朝、ホテル・インターコンチネンタルの窓から、北方に大きなだらかな山脈が晩春の雪におおわれて市を見下しているのに少しおどろかされた。そして間もなく、その雪が黄ばんで目に映るのに気がついた。テヘラン市は海抜一〇〇〇メートルの高度にあるが、エルブルズ山脈の南斜面の果てるところに位し、南方には大きな砂漠がある。砂漠の砂ぼこりが風景全体を何となく黄色くさせているのだろう。

ちょうどその日は回教の聖日にあたる金曜日なので、テヘランにいても仕事にならぬので、会社の車で二日間の、約五百キロ弱の旅に出ることにした。取引先の人がカスピ沿岸の別荘で待ってくれているのも都合がよい。

テヘランからカスピへは車で約二百キロの道のり。ただちに西方にむかい立派な舗装道路をカラジという小邑まで走ったが、このあたりはステップと呼称されてはいても、実のところは石と礫の砂漠であって荒涼としている。砂漠といえば砂丘を思い浮かべるが、岩礫の世界はあまり趣きのあるものではない。

カラジから道は北方に分れ、いよいよエルブルズ越えである。草木一本もない世界は高さを増し間もなく深く雪におおわれ、峡谷には至るところ雪崩が押し出している。しばらくすると色彩豊かな石材で造られた国営石油会社のレストハウスが谷底に姿を見せた。

そこはテヘランで有名なガジェーレ・スキー場で、稜線のコルまで延々二キロ、フランス製のゴンドラのスキーリフトがかかっている。私たちもこのゴンドラに乗り込みコルまで行くと、かなりの数の老若男女のスキーヤーが欧州製の派手なスキー服を着込んで谷底めがけて飛ばしていた。寒さに外套の襟を立てている私たちの北西に、五六〇〇メートルのダマヴェントの雄姿がかなりの距離に眺められる。富士山より尖った円錐形の火山で、よく観察しても氷河らしいものは目に入らなかった。ここはテヘランよりやや北にある。テヘランの緯度はほぼ東京と同じであるが、この山の高さで氷河が見当らないのはどうしたことだろうか。ダマヴェントまでは山また山で、エルブルズ山脈は荒涼として、ほとんど人も住んでいないことだろう。その主峰はいかにも奥山にあって近づき難い印象を与えるものだった。

ガジェーレ・スキー場ではスキーカイト、すなわちスキーをはいたまま大きなタコに身をむすびつけ、カジを握って空中を左右上下に飛翔する壮快なスポーツ、を見た。斜面を一直線に滑り下りるとたちまち空中へ舞い上るそのさまはいかにも面白かったが、中近東でこのような雪のスポーツを初めて見聞することも意外な思いがするのだった。

スキー場から元の舗装道路にもどり、これからいよいよエルブルズ越えであるが、中腹に有名なシャルス・トンネルが貫ぬかれている。このトンネルにさしかかるあたりは風景は美しくなり、沿道にはにごった青色のカラージ人工湖があり、冷やかな澄んだ空気を肌に感じていよいよ山にきたという思いがする。トンネルは長く片道通行であるが、このトンネルこそ北方の美しい豊饒なカスピ帯と荒漠たる南部とを仕切る分水嶺であって、「これを抜けるとこれまでの岩と雪の世界が色彩豊かな植物の世界に一変しますよ、たのしみにしていてください」と同行のペルシャ語のわかるN駐在員は目を輝かすのだった。テヘランの人にとって、シャルスの北方は、ちょうど北欧の人が南欧に憧れると同じ地上の楽園ということらしい。しかし実際にはむこう側もまだ季節が早過ぎたのか、いっぱいの雪でちょっと期待外れであった。

トンネルを抜けきるとすさまじい深峡めがけて車は一瀉千里に下って行く。文字通り英語でいうゴルジュ地形で、その峡の深さはかつて味わった中央ネパールのブリガンダキを想起させるほどのものだった。そのうちに風景は一変して緑のアルプが見えはじめ、しばらくすると濃い樹林におおわれた斜面が顔を出してくる。この大きな浸食谷はよほど急峻で掘りえぐ

られたものらしく、やがて谷はひろがりはじめ、斜面の中腹を走ると、下方にも段丘、上方にも段丘と、ちょうど飛騨川に沿って高山へバスでおりる時ぶつかるような風景が展開する。窓いっぱいに入ってくる空気も暖かく、泥や石で作られた農家のわきには桃、桜、梅やその他の白い花が咲きこぼれ、いかにもひなびていて懐かしい。平地に出ると空気はさらになごんで柔らかく、やがて美しい避暑地シャルスの清潔な白い街並に入った。時計を見ると夕刻の五時。途中のスキー場で道草をくったが朝九時からほとんど走りづめだ。

生れて初めて見るカスピ海は、絵具を流したように静かに淡青色で、何と穏和な柔和な海だろうか。シャルスの埠頭には植物油を運んできたソ連の小さな汽船がとまっていて、夕刻の平和な風景にひときわの情緒をそえていた。大洋よりも低く、日本の本州の二倍もあろうというカスピ海は、今はこのように静かだが、九月からの雨季には大いに荒れるのだという。またはるか北方二千キロの岸にはヴォルガやウラル河がそそぎ、そこでは年の半分は吹雪の世界だともいう。

私たちのこの避暑の街から東方によくペーブされた道を、今夜泊るナウシャール（新しい町の意）にむかって飛ばすと、沿道の海側にはたくさんの別荘が立ち並んでいる。テヘランの高官や富豪のものだというが、全体として建築にひとつのスタイルを持って風景美をつくっているようには思えなかった。

そのなかでも私たちが着いた取引先のS氏の別荘は一番風雅のように思えた。二棟の大きな家屋だが、カヤぶきで思い切って床高にできている。いわゆるカスピアン・スタイルだ。昔からカスピ海岸は有名な米どころであるが、湿気が高くてマラリヤに悩まされた。床高なのは湿気を払うためだ。着くなりS氏は近くの蘭栽培園につれて行く。七千坪の広い培園で鉢も六万以上あるという。S氏は大変な蘭気狂いで、もともとテヘランで趣味でやっていたのがカスピではじめてからこんな本格的なものになり、テヘランでの年間売上げは六億円にもなるという。パパイヤやパイナップルやアゼリアやバード・オブ・パラダイスといった珍しい熱帯植物も作っており、この方面でも一家をなしている様子である。S氏は若いスペイン人の奥さんと二人で、私たちをおいしいディナーでもてなしてくれた。御主人が七面鳥にナイフを入れ、オリーブ油でいためたイラン北部の名物である焦げ米を出してくれたが、カスピのブドウ酒とよい取合わせであった。北インドに旅した人は平べったいナンという焼きパンを賞味されたと思うが、今夕のパンもこのナンで、インドとイランとの文化のつながりを思い出させるのだった。

その夜は近くのホテル・リオンというモテルに部屋をとってくれてあり、寝台がこわれていたのはちょっと閉口したが、ともかく翌朝すがすがしい朝をむかえて南側のベランダに立つと、落葉樹と深い下生えにおおわれた前山の連なりの間に、エルブルズ山脈の奥山が白い雪を見せ、前景はシャイプレースが点在してその間に牛や羊の群れがたわむれている。信州松本平に来たような感じがした。

翌日はしばらくカスピの沿岸を東方に走り、バボルダーという避暑地で昼食をとり、南方に路を返して再度エルブルズを越え、ダマヴェントの麓を通ってテヘランに帰った。

カスピは前日と同じように、オパール色におだやかだった。

少し開けた沿岸に下りるとそこは海水浴場で、この季節に泳ぐ人はいないが、二、三の車がピクニックにきている。海辺で海水を口に含むと塩味の深いのが印象的だった。

中途に白と赤の色の立派な石の建物の一群があり、中央にギリシャ正教のドームが目についたが、そこはアルメニア人の夏の集合地ということだった。

アルメニア人は中近東ではかたまった生活をしていると聞いた。

一時間も走るとパルボルザーの街で国営の立派なカジノがある。そこの大理石の食堂でウォッカとキャビアを食べた。日本のと違って色も青みがかり、少し生ぐさいように思った。しかしここが本場ということだった。

ひき返して南下すると間もなくアモル市を通る。エルブルズ山脈から幾本もの河川が流れこみ、その肥野の中心がこの町だが、中世紀からの米の集散地であって、古い民家の崩れかけたくすんだ壁など旅情をそそるものだった。

アモル市を過ぎて山にかかると、目をうばうばかりの新緑の谷に入る。ところどころに車をとめてカーペットを敷き、その上でお茶を飲んでいるテヘランからの行楽の人たちを見かける。たっぷり緑をたんのうするうちに風景は変わって、エルブルズの正体である岩と礫が顔を出しはじめた。間もなくまったく岩と砂の褐色に塗りかえられてしまう。峡谷はますます深く、両岸には大きな断崖がそそり立っている。私たちはダマヴェントの麓を大きく迂回しているのだ。ぐんぐん高度を上げてやがて肩まで登りつめ、車を下りると、澄みきった空を区切ってダマヴェントが、北方に悠々たる姿を見せている。イラン富士とでも名づけたい容姿だが、優しげではあるがやはり海抜五六〇〇メートルの高さを十二分に感じさせる大きさだった。

私たちの小憩した峠には茶屋ひとつなく、その代りに石小舎の棚に生身を剝がされた羊三匹がぶら下っていた。旅人は夕餉の用意に羊肉の切売りを買って帰るのだ。

峠からテヘランまではまことに長い行程で、途中で小さなスキー場を見たり、国営のトバク場（テヘラン市内ではイスラム教がトバクを許さぬので）を横に見たりして、主都に着いたのは夕刻の六時過ぎだった。

思えば前日の朝から二日間走りづめということになる。私たちも疲れ切ったが、会社の古いドッジもよく走ったものだ。

板倉勝宣の墓碑銘

安川茂雄

いささか旧聞に属するかもしれないが、昨年の二月、テレビの仕事の手伝いで越中立山の麓の芦峅へでかけた。テレビの仕事とはいうものの、実は文蔵やトンコと酒をのむのが目的の大半だった。

その折にワンカットとして、村外れにある板倉（勝宣）さんの追悼碑を撮影した。文蔵、栄治、トンコなど立山ガイドの名物男が結構役者になって、雪に埋れた追悼碑の雪を払ってくれたものだ。この追悼碑、たいへん迂闊だったが、これまでいくどとなく訪れていながら私は一度としてこの墓碑銘を読んだことがなかった。

ただ知識として、槙さんがその銘文をお書きになり、トンコのおやじさんの静氏が建立したという話だけは耳にしていた。そこでこの機会に「若き日の槙さん」の銘文だと思うと、読んでみたくなって、雪を払ってみつめてみたが、これが読めない。まさに立山嵐にみがかれ、判読すら困難だったのである。

判読困難となると余計読みたくなるものだ。しかし、芦峅にはこの碑についての資料は、なにも残されていない。

やむなく、槙さんに直訴してみた。

しかし、槙さんの手許にも資料はなかった。戦災で焼失したとのこと。可能性のあるのは、三田（幸夫）さん、佐藤（久一朗）さんあたりでしょうとのご返事があった。

そこで私は三田さんへ、といいたいが、そのまま怠けて、まだおたずねしていない。

早いところ拓本をとった方がというのがトンコの意見。拓本の方は佐藤さんにご依頼して、と考えた。だがこれもいまだに怠けている。

ヨーロッパ・アルプスには、シャモニ、グリンデルワルト、ツェルマットなど、山好きの憎らしいほどのゆかしく、美しい墓碑や追悼碑がみられる。みんな清楚で素朴で気持がよい。山をみるように心たのしい。

おかしな恩人とか、観光功労者とかいった勲章みたいなものではない真の山好きの故人の気持を心の底からくみとったふうな追悼碑や墓碑……これは気持の洗われる思いになる。

「本当に、山を生涯バカみたいに好きになってよかったな」といった感激と感傷をしんみりと味わせてくれるものなのである。

私は決して実行はできないが、ウェストンのレリーフが梓川の畔にあるのなら、湯桧曽川の岸辺に大島亮吉のレリーフを身ゼニを切ってでも……と夢想することがあったけれども、それは決してしないつもりだ。

こんな粗文を書くこと自体がキザなのである。

しかし、槙さんがアイガーのミッテルレギー小屋をひっそりと建てた立派さを、私たち山の若輩はなんとか学びたいものだ。

●お知らせ——

創立七十周年記念 講演と映画の会

日時 十月二十日（月）午後六時より

場所 東京・九段会館

日時 十月二十八日（火）午後六時より

場所 大阪・毎日ホール

本会は創立七十周年を記念して、毎日新聞社の後援のもとに東京、大阪の二ヵ所で、前記の催しを行ないます。

講師と演目は、東京＝名誉会員槙有恒氏（山への回想）と小西政継氏（冬の北壁の中で）、大阪＝槙有恒氏（同前）と中島道郎氏（高所順応について）です。また映画は「マナスルに立つ」の新プリント版です。

ご知友お誘いあわせのうえ多数ご来場くださいますよう、お願いいたします。（入場無料）

東海道線の車窓から見える南アルプス

石間信夫

東海道線の車窓から南アルプスが見えるだろうか。前山がじゃまになって見えないという人もあれば、必ず見えるに違いないという人もあろう。

山というものは下から見上げた時と、上から見下した時とではおそろしく感じが違うのと同じように、常識ではとても考えられないような所から、思わぬ山が見えるものである。私の観望したところによると、白峰の北岳と仙丈岳を除いては、南アルプスの三〇〇〇メートル以上の高峰は、全部東海道線の車窓から見ることができる。

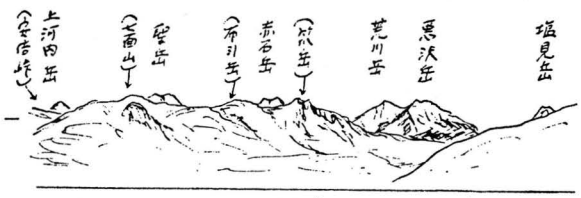
望岳にもっともよい時期は、山が白銀に輝き、空気のよく澄んだ晩秋から早春の午前中であって、水蒸気の多い春や夏はまったく適さない。しかし残雪豊かな時期であれば、晩春でもたまには見えることもあるが、雪がすっかり消えてしまえばいくら空気が澄んでいても、数十里離れた遠山の奥にわずかに頭をだしているこれらの山々を認めることは、よほどこの辺の地形に精通したものでなければ、まず不可能なことであろう。

下り列車が丹那トンネルをでて三島駅にさしかかると、右手の車窓には富士が高く天空を抜いて現われる。ここから富士川の鉄橋を渡るまで、多くの乗客の目は、この富士の麗姿にことごとく吸いよせられ、その下にわだかまる愛鷹山や南アルプスに関心をしめすものは、まったくないといってよかろう。

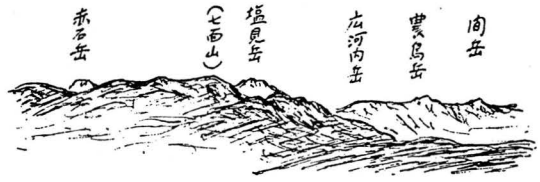
ところがこの区間が東海道線でもっともよく南アルプスの見えるところである。列車が三島をでて黄瀬川の鉄橋にかかると、はるか西北の空遠く、悪沢岳と荒川岳を中心に、笊、布引の上に赤石岳、七面山の上に聖岳、安倍峠の上に上河内岳、そして愛鷹山のスロープの左に塩見岳が小さな白い頭をのぞかせてくる。

沼津駅構内からもこの状態に大した変化はないが、鉄柱や架線がじゃまになり観望には適さない。沼津原の中間までくると、聖岳や赤石岳は、しだいに左に押しやられ、荒川、悪沢、塩見などが景色の中心になってくる。東田子ノ浦、吉原の中間では、再び赤石や聖が車窓の中に入ってくるが、右の端はやっぱり塩見岳までである。

吉原、富士の中間までくると車

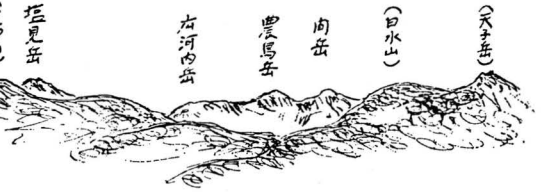


三島・沼津間　(車窓との角度 45度)



吉原・富士間　(車窓との角度 40度)

沼津・原間　(車窓との角度 25度)



富士川鉄橋東　(車窓との角度 60度)

東田子浦・吉原間　(車窓との角度 30度)

草薙・静岡間　(車窓との角度 90度)

藤枝・焼津間 (車窓との角度 90度)

車窓から見える南アルプスのスケッチ／石間信夫

注）本稿の図および文章は，在来線からの観察に基づいていますので，新幹線からは異なる点があると思います（著者）

窓との角度は四十五度ぐらいに広まり、安倍峠の上に赤石岳、七面山の右に塩見岳、早川谷の奥に広河内岳、農鳥岳、間岳がはじめて姿を現わしてくる。富士駅を過ぎて富士川の鉄橋にさしかかると、富士川の上流に農鳥岳と間岳がよく見えるが、北岳が顔をださないうちに汽車は鉄橋を渡って山の陰に入ってしまう。

ここからしばらくの間は、景色も車窓の左側に移り、乗客の目は伊豆の連山や駿河湾の海洋風景に独占されてしまう。清水を過ぎて草薙と静岡の中間までくると安倍連山が右に開け、大棚山と竜爪山の間に大無間山と小無間山、その右に茶臼岳、上河内岳、聖岳、赤石岳が姿を現わすが、車窓との角度はほとんど直角、ほんのわずかな時間であるから、うっかりすると見過ごしてしまうかもしれない。

静岡から安倍川の間は車窓を走る家並がじゃまになるが、大棚山の東山稜打越の上に赤石岳が明瞭にのぞいている。

安倍川の鉄橋からは山伏、大谷崩、八紘嶺、十枚山など、安倍奥の山々が望岳の中心をなしているが、藁科川の上流には黒法師と前黒法師が黒木のピラミッドを仲よく並べている。

焼津を出ると間もなく大、小無間と青薙山の間、七ッ峰の東山稜の上に赤石、荒川、荒沢の三山が並立し、高根山の東に黒法師と前黒法師がチョッピリと頭をのぞかせている。この区間は静岡以西でもっとも望岳に恵まれたところで、大無間と青薙山は藤枝駅を過ぎるまでずっと見えている。

西アルプスの真只中を貫流する大井川の鉄橋からは、意外にも南アルプスはまったく見えない。わずかに金谷駅への登りで、高山と千葉山の間に大無間が、高山の右に赤石が、左に黒法師がケシ粒のような頭をのぞかせるだけである。

金谷のトンネルから南川、掛川までは茶園の開けた丘陵地帯がつづいている。掛川を過ぎると広々とした遠州平野が開け、山はしだいに遠のいてくるが、遥か北遠の山々の上に、大無間から黒沢山へと続く寸又連山が、紫紺の山波を現わしてくる。

この展望は浜松を過ぎるまでずっと車窓につづくが、風光明媚な浜名湖の鉄橋にかかると、寸又連山の上に赤石三山が真白な姿をのぞかせ、八高山の右に富士山が小さく上半身をのりだしてくる。

浜名湖畔を過ぎて愛知県へ入ると、松の多い丘陵地帯に眺望をさえぎられてしまうが、これで車窓展望が終ったわけではない。

豊橋と御油間で豊川の上流に、一宮と岐阜間で東北の空遠く、小さくはあるが明瞭に南アルプスを望みうることは、まったく予想外のことである。

第十五回登山技術講習会を終って

もう一度考え直そう

指導委員会・青年懇談会

例年であれば主催は指導委員会となるところであるが、今年は指導委員会が投げだしてしまったので、形式的に共催ということになった。十四回続いている講習会であり、理由もなく中止することはないと、大倉理事のはからいで青年懇談会が拾いあげ、これに集会委員有志およびナンダ・デヴィ計画グループが協力して、五月二十四日、二十五日の二日間、虹芝寮をベースに谷川岳芝倉沢周辺で行なった。

五月十日、十七日の二回にわたってルームにおいて準備講習を行なったが、十日は年ごとにエスカレートする国鉄ストで参集者少なく開店休業。十七日初級者の装備（松永）、谷川岳開拓期と虹芝寮（渡辺）、谷川岳概要（鴫）、食糧計画（梅本）の講義を行なったが、二日分が集中したので消化不良であった。

五月二十四日、八時現地集合。夜行各駅停車の列車が、突然土合駅停車を取止めたため、急行列車と五分違いで二本の列車から登山客が水上駅に吐き出され、少ない自動車のうばいあいとなり、虹芝寮到着は予定より大幅に遅れた。仮眠する時間もなかったが、ただちに芝倉沢に入り、大岩付近で雪上技術の基礎を訓練した。参加者の登山技術のバラツキが大きく、訓練がやりにくいので、午後は午前中の結果をみて、一部のメンバーを入れ替えて平均化し、訓練を続けた。

「今回は講師の人たちの力量をみるのが第一の目的だ」（金坂チーフリーダー）、「新しい技術には縁がなかったが、ここいらでじっくりとみてみたいので、どんなことをやってくれるのか楽しみだ」（渡辺氏）とし・ゅ・う・とのような先輩の眼の光る中であったが、このくらいのことで動ずるような講師たちではなく、よく動きまわった。夕食後ミーティングと懇親会を開いたが、夜行の睡眠不足か活気がなく、早目に切りあげた。残った有志だけが、夜遅くまでストーブを囲んでいた。

五月二十五日、上級者は幽ノ沢の岩場を登る計画であったが、登山禁止の解除が一週間延期され、禁止中であるため中止、全員前日に続いて芝倉沢に入り、各班ごとに訓練を盛り込みながら、芝倉沢本谷やSb5を経由して一ノ倉岳に登頂、帰路は全員本谷を降り、十六時全部の講習日程を終った。渡辺兵力さんは一ノ倉岳頂上から雪艇滑走の妙技を披露し、喝采を受けた。

今回の講習会を振り返ってみると、数年来この講習会は参加者が減る一方で、昨年などはわずかに九名、まさに中止寸前で、講習会の在り方を問われる状況であったが、今年は何年ぶりかで、三十名の参加があり盛況となった。主催者の取組み方いかんでは、参加者は増えることが明らかになったし、技術修得のよりどころのない初級登山者が、このような講習会に数多く参加を希望していることを知らされた。講師についても例年だと直前まで参加者を確定するのに苦労していたが、今回は自主的に参加し、体験の違いを乗りこえて集まった、まったく多彩な顔ぶれは、今までとはまた異なった雰囲気であった。

講習日程は二日間であったので、参加者の登山技術のバラツキが大きいことと、希望が多様で把握が困難であり、カリキュラムを細部まで組むことができなかった。一通りのことをまんべんなく披露することで、総花的になってしまい、〃これはほんの一部でまったく基礎であって、後はこの講習を思い出して、自分で訓練を続けてほしい〃ということになってしまっている。参加者自身組織的背景のある者が少ないことを考えるならば、事後トレーニングで技術の発展を期待できる方はむしろ少ないと思われ、この講習会限りとなることが予想される。また、これが、ほんとうに基本的な技術で、どのように将来の技術と結びつくのかが予測できないのではないだろうか。教える側としても力点を置きにくく、お互いにはがゆさを感じた。

主催者として本格的に取組むのであれば、困難な点は多くあろうが、初級者のみに限定し、厳冬期を除いた三シーズンを通して、常設的に理論学習とシーズンに大小山行を加えたカリキュラムを作るのでなければ解決はしないであろう。

初めに指導委員会が投げ出したと書いたが、この点についても振り返ってみると、数年来の講習会の不振と講師集めの困難さから、昨年の講習会の体験の上にたって講習会の在り方を検討することが必要であると、確認されたはずであるが、昨年度は何もされず、まんぜんと今年も計画され、五月連休に穂高岳となった。しかし直後に理由もなく取止めになり、そのうちにネパールへ旅行に行くのが理由であるということが風のたよりにわかった。研修会と名付けても一般のパック旅行と何らかわらず、山の中にはわずか数日いるだけのものが、どうして指導委員会の主要年中行事になるのか理解に苦しむところである。数多い会員の希望に応えることは、もちろん必要なことではあるが、指導委員会が担当するよりも、むしろ意欲的な活動を続けている集会委員会などがヒマラヤ集会とでも名付けて取上げるほうがふさわしいのではないだろうか。十五回も続けば、当然時代の変化や、希望の変化が出てきて、その在り方を検討する必要があることは前述した通りである。投げ出すかどうかは、その検討をしてからなされるべきである。さらにまた過去の委員会はその時、その時に応じて技術をまとめた記録を残しているが、最近はまったくやられていないようである。このごろは登山技術も大幅にかわってきている。この辺りでまとめていただくことも指導委員に期待したい。

（堀内章雄）

終りに多忙の中を参加してご協力いただいた講師のみなさまに感謝申しあげます。

参加者 古山美佐子、川島静、秋山洋子、逸見ゆり子、本庄由理、宮田明美、椿シゲ子、岩見頼子、新居夏実、三沢久江、宮田由紀子、稲山明子、杉本勉、松本信三、渕上知典、丑木博、真々田清高、篠原一彰、林秀美、山下隆久、池田崇行、榎本徹郎、長井哲朗、小野有五、河上信政、津田保太郎、佃和夫、戸張陛、秋和田紀雄、Dr. Z. Seiner。

講師 金坂一郎、大倉昌身、山王守英、堀内章雄、渡辺兵力、藤井信、梶正彦、加藤保男、小原俊、梅本霊邦、桐生恒治、寺本正史、鴫満則、薮田晴重、鹿野勝彦、鹿野もりえ、磯野剛太、松永敏郎、神崎忠男、森田勝、事務局 市村洋子

第321回現地小集会
〈上高地山研〉印象記

河野幾雄

昨年落成した山研を一度訪れたいものと、かねてから思いながら、今日まで機会がなかった。その山研で、現地小集会があるという通知が来たので、早速B隊（上高地散策）に申込んだ。外にA隊（西穂往復）C隊（懇談会組）があった。集会は六月二十一日午前九時に山研とある。老人に夜行は無理だから前日に出発した。新宿駅八時発の特急に乗り、松本―新島々―上高地と電車、バスを乗り継いで午後二時には早くも上高地に着いた。教わったとおり、河童橋を渡って右に折れ、車道を二百メートル行くと左へ森の中へ入る小径があり、その奥にめざす山研があった。途中は案内板などまったくないから、入口の標札を見るまで不安であったが、管理人の津村さんに暖かく迎えられてやっと安心した。国立公園のため方向板が建てられないということだ。なお、松本駅前でタクシーに乗れば、五千円で上高地にくるから、仲間が四人もいれば、このほうがかえって安くて早いという。

中へ入って驚いた。実は、こんな立派なものとは思ってもみなかった。どうせ山岳会の小屋だから、土間にストーブ、棚の二段ベッドと想像していたところ、木の香も新しいロビーには豪華な応接セットがおかれ、足立源一郎筆の槍穂高の額や、気圧、湿度まで判る精巧な気象計がかけてある。台所には私の丈くらいの大電気冷蔵庫、電子レンジ。ガス・水道はもちろん完備。風呂場を見れば、二、三人はゆうゆうと入れるステンレスの湯槽。もう湯気がたっている。二階へ上ると、会議室の広い洋間と細長いが十畳はある和室、奥のカーテンの陰には暖かそうな厚い蒲団が天井まで積んである。津村さんは、私たちの食べ物でよければ、一食二百円で作ってあげますという。私は自炊ときいてきたので、食糧いっさいはもちろん、ラジウスやコッヘルまでかついで来た。おまけにビール用にガラスのコップを六個、割れないように大事に抱えて来た。山岳会は早急に、案内のチラシを作るべきである。

そこへ山形県の吹浦から林会員到着。夕飯は津村夫妻を交えて四人、林さん持参の山形県の名産品も加わり、大皿盛りの、山菜天婦羅と野沢菜漬物、卵焼などで豪華な前夜祭となった。ロビーの一隅には、酒、ビール、ウィスキーはもちろん、種々の缶詰類が並んでいる。代金さえ払えば自由に持ってきてよいのだそうである。炊きたての白い飯と、あつい味噌汁はお代りのしほうだい。天婦羅にいたっては全部タラの芽。松本市内の山菜料理店では、たったひと口のタラの芽に、これは後立山まで行って採って来たものだと、店の親父に散々恩に着せられた。二百円ではまことに申訳ない。お酒は電子レンジでたちまちお燗がつく。

六月二十一日（土）快晴、早くも七時半には山崎安治さん、神崎委員長はじめ十名の委員が、料理材料の入ったダンボール箱をもって車で到着。車には、環境庁の乗入れ許可証が張ってある。続いて次から次へと会員が到着する。周布氏（神奈川）、川北氏（愛知）、広沢氏（新潟）、三井氏（山梨）、二木氏（大阪）等の顔が見える。全国から集まって来たという感じである。この意味で、山研の集合は大成功である。

九時には参加者全員が揃い、ロビーで神崎さんの挨拶に始まる結団式といった行事が行なわれ、終ってまずA隊が小原俊リーダーを先頭に西穂へ出発する。山崎さんは山研の水源地を調査するのだといわれて腰に鉈を吊り、たった一人で建物のすぐ裏から径もない薮の中へ入って行かれる。あとできくと、水源の集水装置を調べたあと、善六沢を直登して西穂隊に合流されたという。善六沢は、その昔私が稜線に幕営していた仲間のところへ荷揚げするため、スキーをはいて何回も上下した思い出のある沢である。お供をすればよかった。

B隊はリーダーが伊丹紹泰氏。あとできくとナンダ・デヴィの隊員に予定されているわが国屈指のクライマーとのことである。知らぬこととはいえ、私のリュックを終始かつがせたので、あとでそうと知って冷汗をかいた。B隊の隊員は、参加者の大半が西穂へ行ってしまったので、原君夫婦と私の三人。原夫婦も徳本峠へ行くといって途中で別れたので、隊員は私一人になってしまった。まずはじめに明神池をみせてもらい、前穂北尾根の見えるところまで案内してもらった。新村橋のところで懐しい北尾根を仰ぎ、弁当を食べて引返した。

夕刻、C隊の三名到着。越田和男氏と白井、田中の両女史、女性二人は徳本峠を越して来たというので驚いた。これで全員揃ったわけだ。西穂隊も帰って六時から懇親会が始まる。集合委員の手になる山海の珍味と豊富なアルコール。宴たけなわともなると独唱あり合唱あり、老若相和して山岳会ならではの雰囲気である。なかでも小原君の理大山岳部の歌がよかった。小原君の声もよかった。豪快の中にも哀愁が漂い、山に憧れる心情がにじみ出ていた。山研規定によって十時閉会。ロビーも会議室もたちまち寝室にかわり、予備のシュラーフザックまで動員された。翌朝は朝から雨が降っている。十時矢口委員の挨拶で閉会式があり、三三五五解散した。

『わが青春の登攀』

ボニントン著
青柳健訳

著者は現代英国の生んだトップ・クライマーである。七〇年以後アンナプルナ南壁の登攀に成功、さらに全英隊をひきいてエベレスト南西壁に挑戦するなど、いわばヒマラヤ鉄の時代の立役者として知られている。本書では彼の生い立ちが率直に語られているが、前半生がなみ大抵のものでなかった

ことがわかる。

十六歳のとき、山に魅せられた彼は、スコットランドの岩場で修練をつみ、アルプスの登攀を志してかずかずの記録を残す。その後、英国空軍、陸軍山岳学校をへて、生計のために民間会社に勤務するが、まちかまえていたのは退職勧告状だった。

職業と登山行為との相剋は、山好きの誰しもが経験するところであろう。結局、彼は本書の原題に I CHOSE TO CLIMB とあるとおり、自己に忠実に「山」を選んだのだ。

ヒマラヤにおける活躍は、アンナプルナ峰初登、ヌプツェ第二登となって結実し、アルプスにあっては、モンブランのフレネイ中央稜、ウォーカー・バットレス、アイガー北壁などの登攀を完成する。

本書には山を選んだ男の激しい闘いと内面が描かれている。

一九七五年三月、三笠書房発行、本文三二八ページ、定価九八〇円　（近藤信行）

「ヒマラヤ」（第二版）

ケニス・メイスン著
田辺主計・望月達夫共訳

ヒマラヤの探検と登山の歴史に関する最も信頼できるこの名著が出版されたのは一九五五年。その二年後に田辺、望月両氏の精魂を傾けた翻訳が完成した。

この本はヒマラヤを指向する人々にとっては欠くことのできない参考書であるだけに、五三年のエベレスト登頂で原著が終わっているのが、いささか残念であった。

その点、訳者たちは著者の了解を得て、一九五四年以降マナスル初登頂の年である五六年までの分をまとめてエピローグとして加えていた。さらに今回の訳書「第二版」では、その後さらに活発になったヒマラヤ地域での探検登山を記録するための努力が払われた。

本文の改訂はもちろん行なわれていないが、付録Cで、探検と登山の略年譜を一九五七―七〇年まで増補するとともに、付録Dの文献抄録についても五七―七二年の間の新刊を加え、また新たに邦訳されたものについても、それぞれ原著の項に組み入れてある。

まことに根気のいる増補の仕事であったにちがいないが、この訳者の努力によって、この名著はさらに新たな読者に利用されることと思われる。

昭和五〇年四月、白水社発行、本文四九〇ページ、定価四、〇〇〇円。　（島田　巽）

アメリカン・アルパイン・ジャーナル七三、七四年版

一九七三年の六月、ダウラギリ登山を終えたアメリカ山岳会の若手の隊員数人にカトマンズで会った。見上げるような体格、ある者は満面髭だらけのいかつい様相であったが、簡単に説明した私どもの事故の結果を聞いた彼らが、一様に姿勢を正し、心から哀悼の意を表わしてくれたのに、私はアメリカの若い登山家への思いを新たにしたのであった。

アメリカン・アルパイン・ジャーナル（A・A・J）の一九七四年版には、ダウラギリの高所における急傾斜と脊尾根の困難な登攀や、風に悩まされての彼らの行動がうかがわれて興味深いものがあった。

カット／山里寿男

ともあれ、フェアウェザーとクィンシーアダムスの縦走や、マッキンリー直面登攀の記録で見られる、ジム・ウィックワイア（彼は、現在K2の遠征に参加している）らの登攀方法の中には、適切な表現ではないが、われわれの考える安全性を、ある点では度外視するかのような、きわめて奔放で意欲的な行動形式が見られるし、岩登りの分野でも、これに類似した面がうかがい知れるなど、何か、アメリカにおける登山の新しい傾向が、このA・A・Jの目次の中にひそんでいるように思えるのである。

一九七三年版

冬期ハーフドーム
冬期のグランドテトン
マッキンリー南面アルパインスタイル
ハンティントン―東稜と北面
セントエライアス東稜
アンデス山域登攀の概観　一九六一―七〇年（第一部）
国内主要登山と遠征抄録　一九七二年その他

一九七四年版

ダウラギリ　一九七三年
フェアウェザーとクィンシーアダムス縦走
ハンターの南面と南稜
ハンターの東南稜
ローガンでの冒険
ヨセミテにおける岩壁登攀
アンデス山域登攀の概観　一九六一―七〇年（第二部）
国内主要登山と遠征抄録　一九七三年その他

左記は、A・A・J一九七三、七四年版の目次からの抜き書きですが、アメリカ山岳会からの依頼で販売の取次ぎを致します。御希望の方は、（各冊とも三千円、郵送の場合は三百円を加えて）〒一六四、中野区中野五の三五の八松永敏郎までお申し越しください。

また、今後続けて御購読希望の向きは、その旨御連絡ください。

なお、同会発行のカナディアンロッキー南・北部案内最新版（二冊ともで三千六百円）が僅少ですがあります。

（松永敏郎）

阿寺沢山峡三水会
現地集会報告

昭和二十年から三十年代にかけて、お茶の水体協内にあった昔の日本山岳会ルームで、毎月第三水曜日に集って親しく語り合った山仲間たちが、旧交をあたためようではないかと、去る七月十九日、三頭山麓の山峡、阿寺沢畔の滝見荘へ現地集合し懇談会を催した。

かねて二、三日準備集合を持ち、どこかへゆっくりくつろぎながら思い出話でもとの声があり、それではと今春今井夫妻が発見された阿寺沢滝見荘へ行くことになった。場所は上野原（中央線）からバス約一時間の近距離なので、朝から西原峠を越える人もあれば、早くも宿に着いて、立派な岩風呂に汗を流してくつろぐ人、上野原付近の農家で機織りを見学してくる人などまちまちに夕方六時ごろまでに二十名近くが集まり、久しぶりの対面に昔話が次から次とはずんでなつかしい思いだった。

七時ごろより食事の室に集り、

草木叙情・早春

――坂本直行・佐藤久一朗のスケッチに讃す――

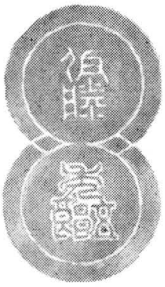
伊藤秀五郎

エゾノリュウキンカ
春が目覚めたようだ。
底雪崩が
遠雷のように、
いや獅子の咆哮のように
谷を埋める。

アカエゾマツ
昨日、毛皮の外套を脱ぎました。
谿谷の氷も溶けたらしい。

ミヤマハンノキ
長かったな、
樹氷をまとった山頂の一冬は。

ミヤマハンノキ／坂本直行



佐藤久一朗画

ミヤマシャクナゲ
手を握って下さい、しっかりと。
わたしたちの会話が、
山稜の岩角に鳴る風に
吹きちぎられて、
と絶えてしまいます。

ハイマツ
厳しい長い冬だった、
気の遠くなるような。
夏の試練のなかにだけ
人間の証しがある、
というけれど。

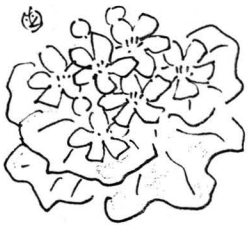
コブシ
不平不満、不和、不況。
地上の不協和音協奏曲は
いつ終るのかしら。

黄水仙
わが身、憂いなし。
天を讃え、
地に額く。
サンタマリア――

クロッカス
おや、春の雷鳴なんて。
――氷河時代のはじまりかしら――

黒百合
あの深い暗黒の奥から来ました。
黒白鳥はそういって
水辺の果てに飛んでいった。

カタクリ
襟元が肌寒い。
どんなスカーフが似合うかしら



エゾリュウキンカ／坂本直行

ツクシ
そよ風にのって
お遍路さんの御詠歌が
きこえてくる。

作詩ノート
二月五日、喉頭手術のため国立ガンセンターに入院、二十五日に手術をうける前のつれづれに、この一連の短詩を書いてみた。いまから五十年ほど前、学生時代にも、この種の草木の短詩をいくつか書いたことがある。例えば

カラマツ（芽立ち）
触らないでちょうだい！

黒百合
陸軍少佐の未亡人よ
いつまで喪服を着ているのです
そんなに悲しそうでもないのに

といったような、軽妙な、諧謔風なものが多かった。

そのころは、北大のキャンパスの林の中にも、エゾノエンゴサクやキバナノアマナなどに混って、黒百合は咲き、まだ原始の香りのする自然林の散策を楽しんだものである。いまはもう北海道にも黒百合は少なくなった。湧払原野などの片隅に、わずかに自生しているにすぎない。心ない職業的な採取者が、ところかまわず、根こそぎ掘り取ってしまうからだ。

五十年で、北海道の、日本の自然環境は、見違えるほど変った。文字通り、桑田変じて滄海となるほど一変した。それにしては、僕の作詩は変わりばえがしないようだ。ただ、このごろになって、ようやく、詩語の緊張感と重量感の意味が、合って

錦織さんの司会のもとに、沼倉さんが三水会復会の経過報告をされ、今日現地三水会が持てたことは誠にうれしいことだと、中河与一大先輩の音頭で一同乾杯をした。

続いて各自自己紹介と近況を語り、今後の希望もそれぞれに聞くことができ、昔の古き良き時代に山岳会で熱情をもって集い合ったころの楽しかった思い出をたぐり、また昔のような雰囲気の中年クラスの人たちのよりどころになるような三水会にしたいものと話し合った。ここはある会社社長の別荘風の建物で、二階が和室、一階が一般の人に空いている時だけ開放するという家で、地下の岩風呂が自然のままの姿で造られ、その豪勢なお風呂がみな気に入って、何回も何回も入った人もいた。

翌日は土曜会御常連の松本、山崎両氏をはじめ、ネパールスタイルの高橋照さんや、中河与一氏、網倉さん、小原夫人、斎藤桂さん等半数ほどの人たちは、暑い中を西原峠から奥多摩側へ下山され、後の半数は、上野原に出て、直行で帰る三人を見送ってから、錦織さん、今井夫人、中川さん、坂倉さんの五人は、橋向うの鶴鉱泉の新築ほやほやの室で昼食後、素朴な鉱泉に再び汗を流し半日をくつろいで夕方帰京した。

西丸夫妻は阿寺沢で水遊びをされるそうで後に残られ、沼倉氏は

きたような気がする。この詩の中の、「黒百合」とか、「ハイマツ」などのようなものは、五十年前に書けなかったろう。

それにつけても、学生時代に「風景を歩む」という小詩集を出して以来、下手な僕の詩を丹念に読んでくれ、いつも感想をきかせてくれた松方三郎に、こんどは読んでもらえないので残念である。いまさら弔詩でもないが、「黒百合」や「ハイマツ」などは、なるほど、と頷いてくれるような気がするのだが。

＊

戦後、僕は昭和二十五年ごろから、「地球の履歴書」のような、いわば科学的叙事詩とでもいうべき詩を書きつづけている。本来、叙事詩は、神話か歴史的物語りを内容とするものが多い。しかし僕は、現代文明批判を、叙事詩の形で書いてみようと考えた。しかも現代の高度の科学的事実をもとにして。奇抜な構想かもしれないが、まだどこの国にもそういう種類の叙事詩はない。

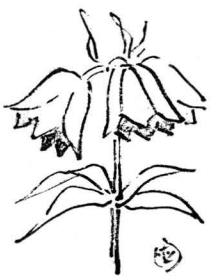
コブシ／坂本直行

僕は生物学を専攻したが、幸い若いころから天文学や原子物理学にも興味をもっていて、その方面の理解力も多少はあるから、現代科学の認識と僕の世界観をもとにして、現代精神文明論を書いてみようと、新しい試作を始めたのである。こういうことが、文学としての「詩」の本質の一つではないかと考えている。

そのかたわら、ときどきこういう叙事詩も書いてみる。道楽とはいえ、詩は僕にとっては生活の一部なので、上手下手は別として、飽きもせずにいまも続けて書いているのだが、書きたいときだけ書くという気ままな詩作ながら、さて出来てみるとやはり人に読んでもらいたい気がする。だからこの「山」にも、いくつか寄稿した。年をとると、若いころと違って、雲のように詩想が湧くということはなくなった。想念がだいぶ枯渇したのは事実だが、しかしいまでも、多少は瑞々しい感覚と思考力はあるらしい。「カタクリ」のような詩を書くと、家人から、いい年をして、いつまでも青年のようね、とひやかされるが、実を言えば、それが僕の身上なんだがと、ひそかにほくそえんでいる。

＊

口幅ったいことをいうようだが、詩人というものは、元来、孤独なものなのだ。少なくとも詩の創作のときは天涯孤独だ。ランボーにしろホイットマンにしろ、お祭り気分で詩は書けなかったろう。詩は言葉の遊びでも語呂合せでもない。言葉としての緊張を欠いた言葉を並べてみても、人の心を深く打つ詩はできない。優れた詩の創作とは作者の精神を焼き尽すほどの、激しい、詩語の選択作業である。だから孤独に徹しなければ、ほんとうの詩など書けるものではない。家人が笑おうが笑うまいが、隣人が軽侮しようがしまいが、詩の発想には関係ない。詩は、ビールやウィスキーや車やデパートの宣伝文とは無縁のものだ。藤村や光太郎や朔太郎のような、ほんとうの詩人の詩境がいまはやりの観光産業やレジャー企業やレコード会社の演出する、いわゆる大衆文化とは、およそ無縁の、断絶した世界であることをみれば、一目瞭然である。


クロユリ／坂本直行

ここで詩論をやるのは場違いなので、この辺でやめておくが登山が大衆化して、登山人口が何百万となるのは悪いことではない。しかし少なくとも、日本山岳会に入会でもしようとする人なら、元来詩は文学の王座に位するものだくらいの常識はもってもらいたいものだ。日本では、三文小説は大繁盛だが、優れた詩の生れる風土がない。万葉から芭蕉に至る詩の伝統がありながら、戦後三十年、朔太郎に匹敵する瞠目に値する一人の大詩人も出ていない。栄作とか角栄という程度の政治家ばかりで、哲学をもった識見のある政治家の出にくい風土と、文化的に一脈通ずるものがあるのかもしれない。

カタクリ／坂本直行

全国の中学の一年生に、藤村の「千曲川旅情の歌」のようなすぐれた、美しい詩の十か二十も読ませれば、大きくなってからも、高山のお花畑を容赦なく踏み荒す登山者などは、姿を消すに相違ない。知識や技術は一人前だが、情緒に乏しい現代日本人にとって、いちばん効果的な精神教育は、国語教育の一大刷新であるかもしれない。

病人がおられて朝帰られたが、この一夕の懇談会は目的を達し、次会は秋ごろ現地集合をと約して自由解散した。

（坂倉登喜子）

参加者 松本熊次郎 山崎金二郎 網倉志朗 伊藤信夫 今井喜美子 小原晴子 小野利次 隈部恵子 斎藤柱 坂倉登喜子 高橋照 中河与一 中保 中川恵資 名児耶達男 西丸震哉夫妻 錦織保清 沼倉寛二郎 早川瑠璃子

（計二十名順不同）

第16回木暮祭のお知らせ

本年の木暮祭は次のとおりおこなわれます。会員諸兄姉のご参集をお待ちしています。

日時 10月12日（金）午前10時
場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山 木暮理太郎翁碑前

なお、終了後、参会者による懇談会をおこないます。

木暮碑委員会委員長 八巻恭介
日本山岳会山梨支部支部長 大沢伊三郎

昭和五十年九月二十日発行
113 東京都文京区湯島一―六―一 利根川商事㈱さくらビル
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 今西錦司
編集代表 大森久雄
(813)二二八六(代表) 振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買い易い
山の店

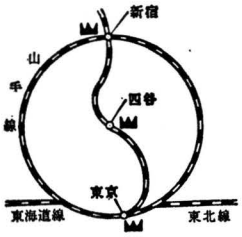
●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



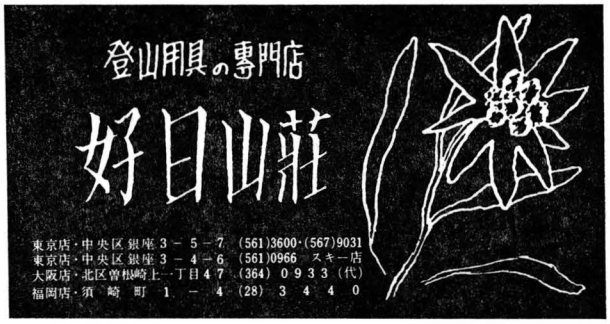
四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店

山友社 たかはし

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718



山の本 一九七五 販売目録

この図書目録は、昭和49年12月現在、茗溪堂に在庫のあります山と探検をテーマとする本を選んで作成したものです。とくに海外登山の記録と報告書等および東京以外で発行されたものは、出来るだけ集めるよう努めました。茗溪堂では、今後もこの方針で目録の作成を続けて参りますので、新しい情報がありましたら、お教え願いとうございます。

定価＝九〇〇円（送料一二〇円）

山の本 売場ご案内

お茶の水店の3階が「山の本」の売場でございます。日本山岳会ルームにお出かけの折には、是非お立ち寄り下さいませ。営業時間は平日＝午前10時30分より午後8時・日曜日、祝日＝午後0時30分より午後6時30分でございます。'75年版販売目録発行以降も新しいものが数多く出ております。丸山道子さん訳書、松浦武四郎の「後方羊蹄日誌」四〇〇円「天塩日誌」五〇〇円「十勝日誌」六〇〇円、慶応幼稚舎の川村博道先生の「素人先生」二、五〇〇円、山梨支部長をなされた三井松男氏の「遺稿と追憶」二、五〇〇円等。お問合せの多い共同通信から出版された「松方三郎」一、三〇〇円も在庫はございます。

茗溪堂 東京都千代田区神田駿河台二の一
振替東京八—二四七二三

新刊図書受入報告（1975年3月～6月）

<3 月>

Die Alpen Club Monatsbulletin des Schweizer Alpen-club '75-1
Alpinismus '75-2
Appalachia 40 (2)
Appalachia Bulletin 41 (2.3)
Austrian Alpineclub Then. Slett '75
Der Bergsteiger '75-1
Deutscher Alpenverein 27 (1)
The Himalayan Journal 32
La Montagne 100 (98)
マッキンレー峰登山計画書
雪崩の危険と遭難対策 第2版
涸沢岳西尾根
雪稜5号頸城山地研究 文献と自然
岳人白稜交流報告 1973-'74
自然保護 153
たどろ '75
低 山 116,117
登山月報 69
山と博物館 2
地図情報 1 (1)
山と雪 202
アルプ 205
岳 人 334
岩と雪 42,50
山と溪谷 430

単行本

明治学院大学学友会 体育会山岳部 四季—鈴木英夫 想い出の文集
佐伯邦夫 ぶどう原に雪ふり積む
今西錦司 今西錦司全集第6巻
安川茂雄 北岳に眠る—日本山岳遭難誌 5-
深田久弥 山の文学全集 12
山 葵 会 奥美濃
山田圭一 ヒマラヤを飛ぶ

<4 月>

Der Bergsteiger '75-2
The Geographical Journal 141 (1)
Mountain No. 41
Österreichischer Alpenverein Mitteilungen 30 (1.2)
Österreichischer Alpenzeitung. No. 1399
Rivista Mensile 95 (1.2)
Till Fjälis 1973-'74
雨飾山
拓殖大学麗沢会体育局山岳部春合宿遭難報告書
兵庫山岳 No. 94
いこいの山岳会 164
国立公園 305
自然保護 154
低 山 118
山と雪 203
アルプ 206
岳 人 335
山と溪谷 440

単行本

ジャック・オルセン著 地獄への登攀
近藤等，安川茂雄 山へのあこがれ
〃 山に入る日
安川茂雄著 立山ガイドの系譜
〃 凍る山稜
藤木九三 岩の呼ぶ声
岡田康男編 わらじ3号（松本高等学校山岳部年報）
福沢武一 木曾文学碑散歩
藤木九三監修 ケルンに生きる—遭難の手記 1～5-
蝋山芳郎 インド・パキスタン現代史
筑摩書房編集部編 世界ノンフィクション全集1 世界最悪の旅
ウォーリ・ハーバート著 北極点を越えて
諏訪多栄蔵編 現代登山全集3 剣，立山，黒部
愛知県山岳連盟 ヒマラヤ登山隊報告書 ダウラ・ヒマール遠征
福田宏年 現代日本記録全集15 探検の記録
串田孫一 峠
佐藤秀五郎 風景を歩む
深田久弥編 現代の冒険2 悲劇の山 栄光の山

<5 月>

エーデルワイスクラブ20周年記念号
京都山岳 601
O.M.C. レポート 305
自然保護 155
山と博物館 4
岳 人 336
山 嶺 541
古地図研究 61,62
アルプ '75-5
いこいの山岳会月報 166
白 稜 236
あしなか 145
国立公園 306
登山月報 73
中華山岳 4 (2) '64
Die Alpen Monatsbulletin '75-3
〃 Zeitschrift '75-1
Deutscher Alpenverein 27 (2)
Der Bergsteiger '75-3.4
Appalachia 41 (5.6) '75
Alpinismus '75-4

単行本

安川茂雄著 谷川岳挽歌—日本山岳遭難誌—
松下電機 Timecapsule Expo '70 記録書
今西錦司 今西錦司全集第8巻
日本山岳研究
村井 葵 写真で見る岩登り入門
北海道自然保護協会釧路支部 釧路の自然
ケネス・メイスン ヒマラヤ—その探検と登山の歴史—

<6 月>

Die Alpen '74-4
Climbing '75-May/June
Mountain No. 42 ('75-Mar/Apr)
Österreichische Alpenverein 30 (3/4)
Österreichische Alpenzeitung No. 1400
Rivista Mensile 96 (1)
Union International des Associations d' Alpinisme No. 64
北里大学ヒマラヤ登山隊 1973 カンジロバ・ヒマール登山報告書
カンバチェン—立教大学ヒマラヤ遠征隊報告書
兵庫山岳 No. 97 兵庫山岳会
いこいの山岳会月報 No. 167 いこいの山岳会
京都山岳 6 (602) 京都山岳会
Montagne '74 (3) 高知グループ・ド・ロック
Mori 1 (1) 林野庁
自然保護 No. 156 日本自然保護協会
登山月報 No. 74 日本山岳協会
山と博物館 20 (5) 大町山岳博物館
山と雪 No. 205 日本登山協会
アルプ '75-6 創文社
岳 人 '75-7, '75 の夏山（別冊） 中日新聞社
山と溪谷 '75-7
山 嶺 542 東京野歩路会

単行本

ケネス・メイスン著 ヒマラヤ—その探検と登山の歴史— 白水社
ジョッフリー・ヒンドレイ著 図説探検の世界史 集英社
奈良山岳会編 大和青垣の山々 大和タイムス
近藤 等著 星空の北壁 白水社
朝日新聞前橋支局編 はるかな尾瀬 実業の日本社
増永廸男著 霧の谷 北陸通信社
エリック・シプトン著 ヒマラヤ<人と辺境>第7巻ダッタンの山々 白水社
今西錦司著 今西錦司全集9巻 講談社
今西錦司著 今西錦司全集10巻 講談社
小林禎作著 雪に魅せられた人々 筑地書館
四季書館編 新編日本山岳名著全集5 三笠書房
ハロルド・W・テイルマン ヒマラヤ<人と辺境>第6巻 カラコルムからパミールへ 白水社

ルーム日誌

（50年7月）

1日（火）常務理事会
2日（水）学生部
3日（木）ナンダ・デヴィ委員会
4日（金）学生部
7日（月）集会委員会、婦人懇談会ヒマラヤ研究会
8日（火）青年懇談会
10日（木）理事会
11日（金）ナンダ・デヴィ委員会
14日（月）集会委員会、婦人懇談会ヒマラヤ研究会
16日（水）財務委員会
17日（木）インドヒマラヤ研究会（学生部）、ナンダ・デヴィ委員会
19日（土）ビールパーティー（婦人懇談会）
21日（月）第一回ナンダ・デヴィ派遣委員会、山研委員会
22日（火）書評委員会、青年懇談会
23日（水）指導委員会
24日（木）ナンダ・デヴィ委員会
28日（月）集会委員会、婦人懇談会ヒマラヤ研究会
31日（木）会報委員会、ナンダ・デヴィ委員会
七月中来室者五六六名

会員異動

支部変更

七七二〇　江藤　秀一　静岡支部
七六三四　古川　房雄　熊本支部
七八六九　西尾　寿一　岐阜支部
三九九〇　亀谷　外穀雄　東京
六七〇五　鹿野　松男　岩手支部
六〇六四　丸茂　キクエ　山梨支部
七三三一　馬瀬　清孝　東京

物故者

三五　三枝　守博（50・7・5）
一四六一　中司　文夫（50・7・8）

除籍取消者

三六二八　雨宮　淳三

退会者

六五九三　金山　方象
六九二七　清水　繁昭

日本山岳画協会について

藤江幾太郎

故中村清太郎氏が日本山岳画協会創立の趣旨を山岳会会報に発表されたのは昭和十一年でありました。私が同会に参加するようになったのは十数年前ですが、終戦前後の混乱期を除き、毎日同人展を開催し作品発表を続けて来た由であります。しかるところ、諸氏ご承知の通りさきに中村氏逝き、また先般足立源一郎、石井鶴三両氏相ついで他界されたので、山岳画協会のメンバーは新しい世代となった次第です。

現在会員数二十名。山岳画研究グループとして美術界の有志によって組成され、毎年作品発表のため展覧会を開催しており、本年も七月十八～二十三日にかけて神戸で行なわれ、好評を博しました。東京展は以下の要領です。お誘い合せご清覧ください。

東京展　九月二十三～二十九日
於　新宿駅ビル6F
ギャルリー・アルカンシエル

事務所　東京都新宿区下落合
三―二〇―九
足立真一郎　方